

大賀蓮の発掘と経緯

東京大学大学院農学生命科学研究科
附属緑地植物実験所
技術職員 南 定雄



発掘記念碑と大賀蓮の開花

東京大学総合運動場

大賀一郎博士の略歴

- 明治16年(1883年)4月28日 岡山県吉備町に生まれる
- 明治35年(1902年) 19歳 東京帝国大学理科植物学科に入学
- 明治42年(1909年) 26歳 東京帝国大学理科大学植物学科卒業。卒業論文は『アサガオの細胞学的研究』
- 大正6年(1917年) 33歳 南満洲鉄道株式会社社員として中国大連に赴任
- 大正12年(1923年) 39歳 アメリカのThe Johns Hopkins Universityに留学。米国の新聞に「500年生きた古いハスの種の発芽に成功」と報道された
- 昭和2年(1927年) 43歳 東京帝国大学より理学博士の称号を受ける
- 昭和10年(1935年) 52歳 ハス花の開花時における、有音、無音を確認のため、上野不忍池 弁天堂に観察実験を行なう。
- 昭和25年(1950年) 67歳 朝日新聞社の「平泉中尊寺藤原三大遺物学術調査」に参加、植物の調査を行う。
関東学院大学教授に就任及び同学院高等学校生物学 特別授業に出講
- 昭和26年(1951年) 68歳 千葉県検見川の泥炭層から約2,000年前の古代ハスの実の発芽に成功する(数日後枯死する)
検見川の泥炭層出土の古代ハスの実の発芽に成功する。
「当麻曼荼羅は織物である」と『国華』誌上に発表、約60年に渡る絵画説、織物説を巡っての学会の論争に終止符を打つ。
- 昭和27年(1952年) 69歳 織物研究報と麻布の種類及びこれらと古裂との関連性の調査のため、正倉院に出張する。
その後、宮内庁、庁官の依頼により、昭和30年まで毎年、秋季正倉院開封中の5日間宝物材質調査の一員として植物部門、特に麻布について予備調査を行う。
7月18日「二千年ハス」(大賀蓮)が初めて開花する。国内外に報道される。11月17日付米国ライフ誌に掲載される。
- 注:検見川出土の丸木舟の櫂の(古材カヤ)埋没年代調査をラジオカーボネストにより行った結果、3,075年±180年と鑑定される。(依頼先、米国チューニー教授、ラジオカーボネスト実施はW.F.リビー博士)
- 昭和33年(1958年) 妙蓮を金沢持明院より故池近江森山町田中に講来されるも成功せず
妙蓮を府中市中央公園と自宅の小池に移植する。
- 昭和35年(1960年) 77歳 孫文蓮の播種を行う。
- 昭和36年(1961年) 78歳 紫綬褒章を授与される。
参考:授与理由「多年、ハスの研究に専念し、さらに進んで国宝当麻曼荼羅の構成について科学的な解明を行い、日本古代染織史の研究に寄与する等事績誠に著明である。
- 昭和39年(1964年) 81歳 「大賀蓮発掘記念碑」が、千葉県検見川の古代ハス発掘の地(東大検見川総合運動場内)に建立される。東京オリンピック開催される。
自宅において倒れ、入院する。
- 昭和40年(1965年) 82歳 永眠。(6月15日) 勳三等瑞宝章が授与される。
ハス約20種が千葉県検見川・東京大学農学部園芸実験所、府中公園、都立神代植物公園等に移植される。

ハスの実を求めて

東京大学厚生農場へ

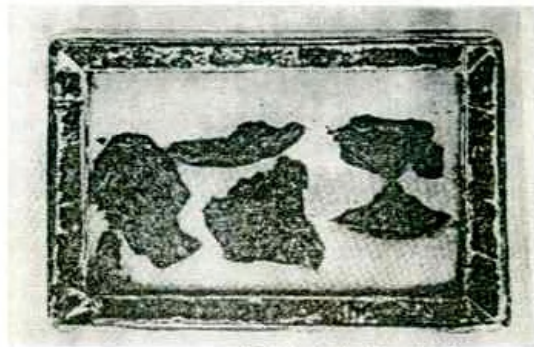
植物の種子の寿命はあまり長いものではありません。多くのものは数年から4年から5年に過ぎませんがマメ科やハス科などの皮が厚く、硬い種子はある条件があれば長寿であるといわれている。理学博士の大賀一郎先生は、中国東北部の大連に近い普蘭店出土の1000年以上と推定される蓮の実の発芽試験に成功している。

しかし昭和25年の初夏、千葉県滑川の出土で1200年前の須恵器の中にあつた蓮の発芽処理をおこない発芽には成功したが、管理の手違いから残念ながら枯死してしまつた。

大賀博士は、蓮の実の生命を甦らせることに夢を抱き、これに変わる古代蓮の実を探していました。武蔵野郷土館に丸木舟と蓮の果托が展示してあつたのを思い出し、果托が出たなら蓮の実も出るに違いないと思い発掘の計画をした。その年の秋、丸木舟の出土地・検見川厚生農場の草炭採掘地を訪れた。



掘だされた丸木舟（昭和22年11月）



掘出された蓮の果托

この検見川の草炭採掘地を掘れば、生きたままの古い蓮の実が出る。このこと確信して大賀博士は、丸木舟の発見地の北55mの場所を東京大学や千葉市、地元の人々協力により昭和26年3月3日から蓮の実を捜す発掘が開始された。



当時の東京大学総合運動場



発掘現場

花園中学校ならびに畑小学校の生徒も土壌ふるいに参加し、表土、泥炭層、青泥層と進むが、予定の期間も過ぎ、費用も底をつき、作業中止もやむを得ないと思われた3月30日、花園中学校の生徒がふるっていた青泥層の土の中から一粒の蓮の実が発見された。発掘作業はその後も続けられ、4月6日更に2個がふるい出された。この古蓮の実は地下約4.8mの青泥層からの出土と確認されている。



発掘の様子



土ふるい作業をする女学生

古蓮の発芽

古蓮の発芽試験は1951年5月6日大賀博士の自宅で行われた。発芽処理（種子の端部を鋏で切除）をした種子を水の中に浸した。



発掘された3個の古蓮



THE SPROUT APPEARS on the fourth day after the shell was cut. Dr. Ohara predicted that the flower would be pink, came true 13 months later.

「L I F E」で紹介された古蓮の発芽

一粒は発芽後すぐ枯死したが2粒が生育し始めた。しかし6月12日に千葉県農業試験場に届けられた実生苗は3枚目の葉がでかかっていたが、植付ける前に枯死してしまった。

3月30日に出土した実生苗を6月17日に大賀博士の自宅に、千葉県農業試験場の石渡英夫氏が受け取りに行った。そして19日にコンクリート製の水槽に植付けた。その後、最新の注意が払われ管理された。9月末には8枚の葉がでていて蓮根の発育が順調で、来年の開花を大賀博士はこの時すでに予想されていました。

昭和27年4月7日に大賀博士立会いのもと蓮根が掘り上げられ、3つに分根された。約60cmの大きい蓮根は東京大学検見川厚生農場に植えられたが管理上の都合で4月10日に地元の伊原茂宅に移された。約40cmの蓮根は千葉公園に植えられ、最も小さい蓮根は千葉県農業試験場の圃場に植えられた。

古蓮の開花

伊原氏宅で育てられていた古蓮は順調の育ち、1952年7月の1日に1本目の蕾がでた。14日には2本目の蕾も出てきた。開花は7月18日で先端が僅かに開いた。翌日19日は開花2日目であらゆる眠りから覚めた蓮はその全容をあらわし大賀博士や発掘に携われた人々に感動を与えた。



蕾を調べる大賀博士



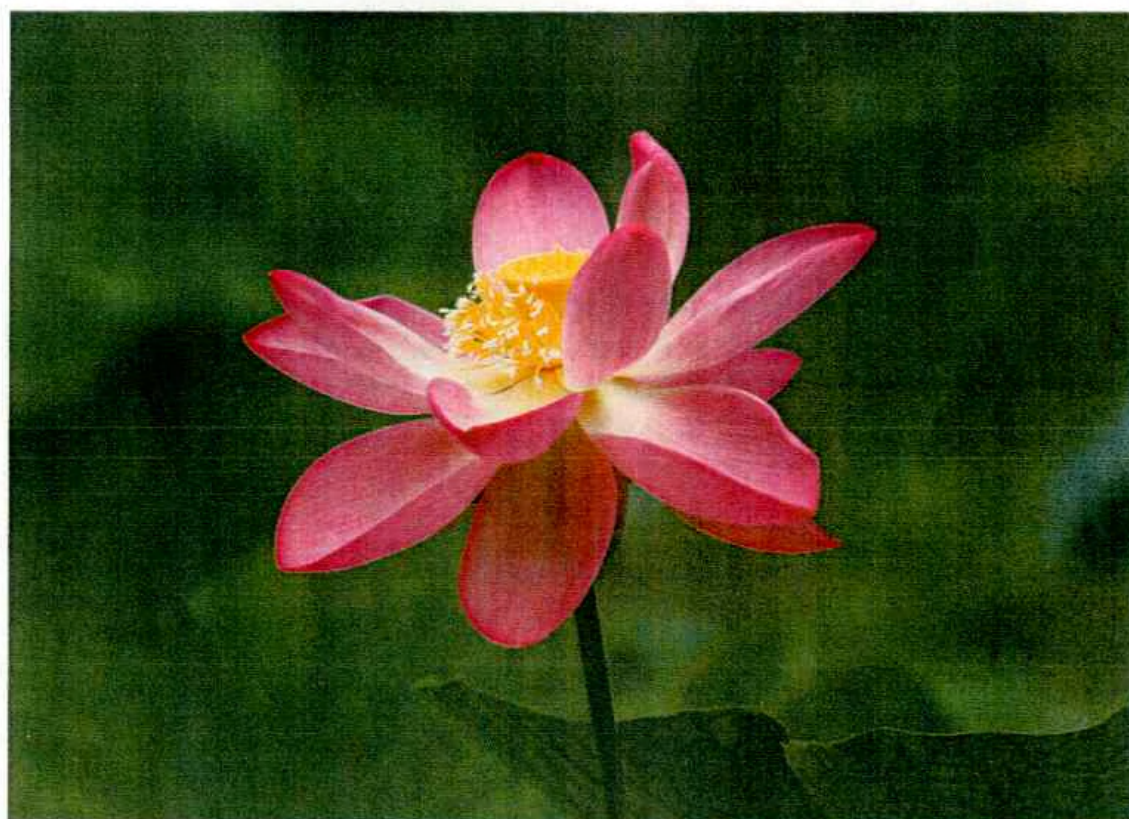
「Life」

この偉業は新聞でも大々てきに報道された。写真も撮られ1952年8月11日の「毎日クラブ」や11月27日付きの「LIFE」で全世界に発信された。特に当時カラーで紹介された(LIFE)の写真は現存するカラー写真では唯一のものである。

花は淡紅色、花弁数23枚で一重咲、花径は25センチの大型の花であった。その後千葉公園に植えられていた蓮も1953年8月5日に開花した。千葉県農業試験場で育てられていた蓮も1955年に開花している。

「大賀蓮」の命名

1953年4月25日に「検見川の大賀蓮」と命名され1954年3月31日付で千葉県天然記念物に指定された。その後「大賀蓮」とよばれて観賞用花蓮の代名詞になり全国に東京大学厚生農場〔現、東京大学総合運動場〕から発掘した蓮として有名になった。「大賀蓮」は発掘をなされた、大賀一郎博士の蓮にかけた情熱と発芽にいたる経緯などロマンと神秘性をかもし出していて、今も見るとをひきつけている。国内の各所はもとより、中国、アメリカ、ドイツ、台湾、ブラジルと海外にも分根され、「蓮は平和の象徴也」と世界の平和を願われた大賀博士の意思が海外との友好に一翼を担っている。



大賀蓮（開花2日目）